

ワークライフバランスについて考えてみる

中原 剛士

九州大学医学部皮膚科診療准教授

ワークライフバランス、最近よく耳にする言葉ですが、実際に言葉で説明するとどうなるのでしょうか？ 内閣府のサイトによると、ワークライフバランスとは「仕事と生活の調和」であり、仕事と生活の調和が実現した社会は、「国民一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会」と定義されているようです。いままでのこのコーナーを拝見しますと、素晴らしい女性医師たちの壮絶な(?)皮膚科医人生が書かれていることが多く、感銘を受けるとともに、「仕事と生活の調和」の実現が非常にむずかしい時代であったことを感じざるをえません。

私の皮膚科医生活を振り返ってみると、自分のやりたいことをみつけ、積極的に自分から動く、ということはあまりできずに、多くの時間を「与えられた環境」の中で過ごしてきた気がします。もともと父が皮膚科医であり、あまり深く悩むことなく皮膚科を選びました。3年間必死に臨床のトレーニングを積んだ後、臨床大学院に進んで研究に没頭し、先輩方に導かれるままに留学を決めました。この時代はまだ、とにかくしっかり働くことが当たり前と思い、仕事・研究に忙殺されていました。しかし、早く一人前の皮膚科医になりたいと思っていたので、そのことはまったく苦にはなりませんでした。

留学から帰国後は長い研究中心の生活から急に医局長、病棟医長、外来医長と医局のマネジメントに関わることが多くなり、ハードな毎日でした。しかし、比較的若いうちに大きな医局の医局長を勤められたのは大きな経験であり、女性医師・女性スタッフの増加を目の当たりにして少しずつワークライフバランスというものを意識するようになりまし



た。そして、医局員全体の多様性を受け入れることの重要性を感じるようになりました。同時に、その多様性は誰もが同じ価値観ではないということでもあり、いろいろな場面で皆に平等と感じてもらうことのむずかしさも感じています。

こうやっていままでを振り返ってみますと、個人的にはワークライフバランスをあまり意識せずに生活を送ってきたことに気づきましたが、結婚して子どもができると、意識せずとも自然に働き方は変わってきました。また、医局の中の雰囲気も時代とともにまだまだ変わってきていると思います。しかし、「やりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たす」の中で、「仕事上の責任を果たす」の部分は決して忘れてはいけないと思います。これからも、時代の変化や個々の多様性に柔軟に対応しながら、日々頑張っていきたいと思っています。